

【速報！第47回支部学習会一次案内】

映画「マイペース マイスペース～ひきこもりソーシャルワーク」

上映会の成功をめざして

2026年10月3日・4日に開催される全障研道支部第47回支部学習会の一環として、10月3日(土)にドキュメンタリー映画「マイペース マイスペース～ひきこもりソーシャルワーク」の上映会がもたれます。これに先立って、場面緘黙・不登校・ひきこもり経験者である大橋伸和さんに本作のもつ意味について執筆していただきました。

ひきこもり当事者の「感覚」を凝視した一作

大橋 伸和(場面緘黙・不登校・ひきこもり経験者)

一人のひきこもり経験者の見地から、映画を見てまず感じたことは「共感」です。それと共に、映画の舞台となっている古民家カフェ「創—HAJIME—café」の様な場がもっと全国で一般化すればいいのという思いを抱きました。

共感した点を挙げると「どこに行っても迷惑をかける」「申し訳ない」というメンバーの語りです。ひきこもり状態になる人は、甘えている、怠けているという風潮がありますが、私も含め多くの当事者は望んでひきこもり状態になるわけでは無いと考えています。

ひきこもりの背景は様々ですが、その一つとして、学校や職場という社会生活場面における適応の出来なさや期待に応じることの出来なさ、それを積み重ねていかざるを得ないという事情があります。その結果、一般的とされる社会的場面への恐怖や絶望を抱き、自分自身の存在を肯定できず、自室というシェルターに身を寄せることになります。外出したとしても、対人場面や社会的場面から距離を置くことになります。こうした方法を取らざるを得ない状況が、第三者から「ひきこもり」とみなされるのです。

その結果、社会での生活に自分という存在自体が異物と感じてしまい「迷惑をかける」「申し訳ない」という自己存在の卑下に至る、というのが私の見立てです。

では、そのひきこもり状況から、安心できる社会生活へ、どのようにアプローチすればいいのでしょうか。その答えの一つをこの映画に感じました。

カフェについて、職員の方は、働く場であり居場所であると話されていました。そして、カフェという働く場へ出勤する際にも、休みの連絡はしてもしなくてもよいというスタイルです。また、長髪のメンバーの存在など、いわゆる一般常識から少し外れても大丈夫という“ゆるさ”が有ると感じました。

この“ゆるさ”こそ大切だと私は実感しています。“ゆるさ”は甘やかしじゃない、自分と社会を隔てる高い城壁を通過できる扉だと思うのです。では“ゆるさ”を第一に優先してカフェを営めるのか？という疑問も生じると思います。私の感覚では、むしろ社会常識に合わせるべきという価値観を第一に優先して城壁を越えさせる考えでは解決に至れません。効果的なのは、城壁を無くすことや、通過方法を作ることにより、社会的場面へのアクセスを保障することです。すべてはそこから始まるのではないかと考えます。この具体

的方策が“ゆるさ”という方法ではないでしょうか。

カフェで、バンダナとマスクを装着する事への抵抗感を示す当事者の語りを捉えるシーンがありました。私には強く共感できる箇所でした。私もまた、業務上のルールのような一般常識に、自分が合わせることへの嫌悪感がありました。なぜ、嫌悪するのか。それは、自分に歩み寄ることなく散々自分を排除してきた社会に自分から歩み寄りたくないという社会へのルサンチマンから生じる感覚です。

その後の場面では、バンダナとマスクを付けたくないとするメンバーが、それらを装着するシーンがありました。どんな思いで装着しているのだろうと思いを馳せました。

私の自分語りになってしまいますが、喫茶店を営む小規模作業所において、バンダナを付けずに活動していた時がありました。しかし、次第に付けるようになったのは、居場所でもあり、メンバーへの仲間意識も醸成され、仲間同士で頑張るんだという意識から、わかってはいたけど抵抗していた業務ルールであるバンダナを付けるように変化したのです。

ひきこもり当事者への面談場面もありました。そこで行われるのは、作業やボードゲームをしながらの面談です。これは当事者にとって嬉しい手法です。なぜならば、一対一言葉のみで面談という対人交流をするのは、不安が大きく自分の意見や思いも出せなくなってしまうがちなからです。作業やゲームをしながらですと、顔を合わせないことも自然です。言葉を紡ぐ際に時間がかかるのですが、そんなしんどい沈黙の間も作業で補うことができます。楽しい空気は、緊張を和らげてくれます。

当事者と職員の共同講演の場面も印象的です。そのシーンでは当事者と支援者の観点の違いが浮き彫りにされていました。「コンビニでアンマンを買えない」という話では、支援者視点だと対人コミュニケーションの課題があると分析されがちです。しかし、当事者は「店員さんにアンマン設置コーナーまで移動させて、探させて、持って来て、包んで…という手間をかけさせてしまう、もしかしたら、アンマンが品切れの場合は謝罪の言葉を出させてしまう」と店員さんに不快な経験をさせてしまう感覚が披露されていました。ここでは、当事者が語るという大切さをまざまざと感じさせてくれます。

様々なひきこもりの居場所であり働く場でもあるカフェでしたが、すべての当事者がここにつながり活動できるかというと、難しい面も感じます。とはいえ、非常に大切な営みの一つだと強く思います。

今後は、全国にもこの映画のようなカフェや他にも幅広い多様な営みが、継続的に行えるように、行政の理解と資金的サポートが必要になります。ひきこもり 146 万人時代と言われていますが、氷河期世代の現状のように放置するわけにはいきません。私もまた、ピアサポーターとして、当事者と共にどんな営みや社会の在り方がよいのか、模索し合うことを望んでいる身です。「マイペース マイスペース ～ひきこもりソーシャルワーク」上映会の成功を願っております！